

「破綻国家ニッポンの挽回策は哲学と教育」

＜ASSETS特別版＞

菱木勤治著 <あけび書房> の紹介

日本の教育は様々な問題を抱えて破綻している。日本の現状を見ると、一番問題が多いのは「教育」であり、次が広い意味での「格差」問題であると思われる。多くの識者や専門家が教育の問題を指摘し、解決策を提案しているにもかかわらず、政治家や文部科学省そして教育関係者やメディアはこれらの問題に真剣に立ち向かおうとしない。

菱木さんは、内田樹・上野千鶴子・金子勝・尾木直樹・山本太郎・森永卓郎・(故) 森嶋通夫その他の人たちのように、少し前までにはテレビに出ていたが、今では安倍晋三や菅義偉などによる放送界への圧力というよりも脅しによりテレビではあまり見られないがしかし、今でも「良識ある新聞」や「世界」のようなまじめな雑誌には登場されているこれら「公平で誠実な学者や評論家の人たち」の書物を読んだ後で、この書物に書いてあるような考えを持たれるようになっていきます。志成館の館長の森も菱木さんが列挙しておられる方々の書物を読んでおり、彼と考え方の核心部分はほぼ同じです。以下彼の著作(P. 106～)をわかりやすく書き直していますので、もし教育に興味があったら読んでください。もちろん菱木さんの本そのものを読むのが一番なのですが。

日本の教育の破綻の具体的な姿

(1) 「どのような人物を育てるか」という教育をする根本の目的に関する問題がある。このことに関しては、終戦直後の民主化時代に作られた「教育基本法」が掲げる教育の目的が参考にされるべきでしょう(森)。

ごく普通の教育学の本を読むと、「**教育の目的は次の4つ**」があげられている。しかし日本ではそれらの目的が達せられてはいない。以下4つの目的の達成度を示す。

その1) **社会生活に必要な知識や常識や技能を身に付けさせること。**

→高校や大学の受験の制度を乗り越えようという過程での学習については、学校や塾や予備校では一般の知識そして専門学校では専門的な知識や技術力をつけているので、この点についての問題は少ないと考えてよいだろう。

その2) **自我を確立し、個性を伸ばすこと。個々人に自尊心と自己肯定感を持たせ、個々人が人として心豊かな人間であるという感受性=情操を持つように育てること。**

→この点については、50%くらいしか目的が達成されていない。日本の子供たちには誇りがなく、自分の心のすばらしさに気が付いてないし、幅広い教養を持つことのすばらしさに気が付いていない

その3) **想像力、独創性、批判的な精神力を備えて、それをもとに自主的になおかつ自由に物事が判断できる子供たちを育てること。このような基礎的な精神をもとに、よりよい社会をつくるために議論をしたり、外部に対して表現できる能力を身につけさせること。**

→この目的は40%～45%くらいしか目的が達せられていない。日本の子供たちは「批判的な精神」を認めるどころか、そのような意見は異質で有害であると考えがちである。

その4) **一人の国民として大切な民主主義社会の担い手という教育、それをもとにして自分の国や社会をより良くしていこうという意識を育てること。**

→この点に関しては10%くらいしか実現されていない。日本の若者は「政治」に関わろうとはしないし、「政治にかかわることで社会が良くなる」という認識さえ持っていない。「公民」としての責任感が全くないと言っても過言ではない。しかも先生や校長や教育委員会が批判的な精神を持った子供達を潰しており、彼らはそれが自分達の仕事であると思っている。

(2) 教育についての行き過ぎた国家管理や統制の存在。その中には恣意的で学問的であるとは思えないほどの教科書の検定制度や学習指導要領の在り方も含む。

→文部科学省は、使用する教科書を義務化し、指導要領でも授業内容を細かく規制しているために、現場である学校や教師に「教育の自由」が全く保障されていない。そのような授業に子供たちが興味を持てないわけがない。

(3) 地方でも教育委員会の統制や管理が厳しく、行き過ぎた校則に溢れている教育現場となっている。個々の熱心な先生の意見など一顧もされていない。

→いろいろな決まりで生徒を縛り、違反者を罰するという仕組みの中では、次の時代を担う発想力と個性に溢れる子供たちが育つはずがない。

(4) 学校でのいじめの問題や不登校の問題などがいっこうに改善せず、教育現場での命と安全が守られていない。

→学校でいじめや不登校や自殺が起きても、教育委員会や学校は、これらの問題に真剣に立ち向かおうとしないだけでなく、学校によっては自殺の原因がいじめであったとわかっているにもかかわらず意図的に因果関係を認めようとしない。裁判所も同じで、子供たちの基本的な人権さえも認めない判決が多すぎる。

(5) 最底辺の学力の生徒が多いという悲惨な教育現場の存在。

→都会や地方に限らず、最低限の基礎学力や知識を持たない生徒がいる学校がたくさんある。高校だけではなく、中学校の学力もない生徒が大学進学している。これでは日本の産業社会が危うい。

(6) センター試験という、入学試験問題の作成という負担を減らすという便宜だけのためにある、まさしく個々の大学の自主性を否定するような制度の存在も問題である。

→しかもその一部の英語力などの最新の学力を把握するためという不可解な理由で、ベネッセなどの営利を目的とする民間企業に試験を丸投げしようという、恐るべき文部科学省の劣化が見受けられる。1991年に、「中央教育審議会」という、どちらかというと政府寄りの団体からでさえ批判されている制度の存在がなくならない事。2021年の7月には、さすがに民間企業による大学入試の統一試験は今後行われなくなりました。

***この文書の(1)の「**教育の真の目的**」についての4つの事項について、志成館では、「学力の向上だけが塾の責務であるというような多くの塾の流れ」そして時代の流れに抗して、設立当初から「人を育てる」というあまりにも当然なことを塾の目的として懸命に努力してきた塾です。今日、ようやく「教育の真の目的」について語られつつあるようになりました。志成館はこの傾向をととても歓迎しています。今後も上記の「教育の真の目的」の達成のために努力を続ける所存です。ご理解いただけたらとてもありがたいし感謝いたします。

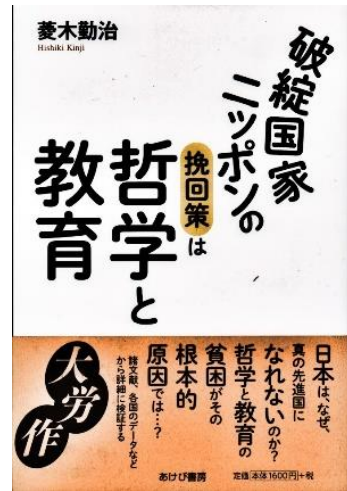
尚、上記の視点から日本社会を見てみると、学歴に関する誤った評価が多すぎます。下記のマイケル・サンデル、ハーバード大学法哲学教授の著書を参考にいただければありがたいと思っています。そこで事のついでに、ここに館長の決まり文句を載せます。

「東京大学を出ても、バカはバカ！！」

笑い事ではありません。「人間は人としての立派さが最優先する」という意味です。「東大出身という学歴を持った人たちの多くがいかに日本社会を壊しているか」はわかっておられるはずです。たとえ東大に行かなくても、あなた達もこの言葉が言えるようにならなければなりません。

もちろん、森は学習塾の館長ですので、志成館から東京大学に進学されることも願っています。そしてノーベル賞を受賞された福岡高校出身の大隅良典さんのように、まじめで有能でなおかつ謙虚な東京大学卒業生になってください。

2021年8月1日 志成館 館長 森 英行



【左】2冊は、上の文章に出てくる菱木さんとマイケル・サンデルさんの本の表紙です。

最近の数年の ASSETS は難しすぎるし面白くない。実は5~6年ほどまでは、もっと気楽なものでした。しかし森が責任ある地位を任せられ、責任ある言動をする必要があったので、「あなた達志成館の生徒諸氏の未来がよりよくなるように」と願っての難解で生真面目な ASSETS が中心になっています。以前は下の様な「クイズ」などが中心でした。楽しんでください(笑)。

